おおやまと

大倭出版局・大倭紫陽花邑

平成31(2019)年
1月号
通巻581号
毎月23日発行
(題字　矢追日聖)

★発行日　平成31年1月23日
★発行所　大倭出版局
〒631-0042 奈良市大倭町1の12
☎(0742)44-0015
★印刷　大倭印刷株式会社
★定価　1部　250円
年間購読料3,000円(送料共)
★郵便振替　01050-6-67002
大倭出版局
URL http://www.ohyamato.jp

「永遠(とわ)の景」　朝の富士山、山梨県忍野村にて　　奈良市　和田　保さん撮影

再録　『すさのお』紙より

庶民の生活に深く根ざした土着信仰（全16回）

法主　矢追日聖

（三）
昭和43（1968）年1月23日発行
『すさのお』第16号より
（法主、満56歳）

正月の行事

新春の行事は、つまり古神事のなごりであるということは、『大倭新聞』第十七号「大倭千一夜」で簡単に述べたことがある。（※一部抜粋します）

《門松は夫婦の形とその心的内容を神に示し、鏡餅は子や孫の弥栄(いやさか)を祈るために神に供え、特に〆縄は宇宙創成の神威を具象的に現わしている。

陰性、陽性と仮定した二筋の藁をねじ合わせ、完全に一体となったときの姿を現わすに、波状的に噴出する両者一体の気を白紙で、段々のたれを創作し御幣と称してつけたあたり、まさにかしこみ、恐みだね。》

アジア大陸の宗教や思想や物資文明が、日本の地に渡来しなかった頃の我々の先祖達は、日常の中でカミ（自然神と人格霊、及び動物霊も含む）と共に暮らしているという信仰を強くもっていた。勿論この時代の人々には鳥獣が本能的に受ける感応のようなものがそれぞれ備わっていたと思う。人間の場合は、それを霊感とか霊能とか言っているに過ぎない。

古代人は、居住の場を選んだり狩猟や農耕のやり方や、日常生活のすべてが、天地の祈りから来る霊的感応によって行ったようである。極端に言えば、生活そのものが神事であるとも見られるのである。中でも「まつり」はその重要な暮らしの要素であった。「まつり」は神と人が交流一体とならねばならないので、そこで「みそぎ」という神事が暮らしの中ではかなり上位を占めたのである。神と共に暮らしているために、人々は穢れをきらって、いつも清浄にすることに努めた。神事は祓い清めから始まる所を見ても分かると思う。

住居や自分の体を清潔にすることも神事の一つであった。温泉郷が繁栄する遠因もこうした所にあるのかも知れない。現在見るような不潔からくる悪疫などは、恐らく清浄を好む古代人の間では起こらなかったと思う。

また更には「みそぎ」によって、自分に備わっている先天性を知ることができたので、この人達の間では優越感や劣等感はなかった。人々は自分がもつ先天性を、お互いが各自の暮らしの中で活かすことができたから、自然と和やかな社会ができた。そしてその社会は、個人差の持ち寄りによって調和が保たれていて、組織なき組織、無統制の統制といった不可思議な自然発生的なものとなっていたと言える。

集団には、これを統治する首長がなければならない。命（ミコト）（先天的役目）がお互いに認め合えるこの種の集団にあって、首長は選出ではなく神意に添った人がつく。これはすべての人々が自己の霊感によって認め得る人でなければならない。

日本のスメラミコト

つまりこれが、統（す）べ治める人、所謂（いわゆる）「スメラミコト」（天皇）である。分かりやすく言えば、スメラミコトは神と人の中間的存在で、神と人を結びつけて、霊界と現界が車の両輪の如くに、大らかにして和やかに交流をはかりながら動くように、運転する技術者に等しいのである。換言すれば、神の御意志によって「まつりごと」（政治）を行う神主である。

人々は、スメラミコトは八百万（やおよろず）の神々の代表者であるから人間の中では特に神聖視することになった。これには、政治的権力や才能や技量や人格等は問題外である。たとえ、人として首長の座を占めるに最適任者がいたとしても、若しその人が、霊界・現界を結びつけるミコトが欠けていた場合は、この人は、その資格者と言えないのである。

要するに古代の人々は、神と共に暮らしているという信仰に徹していたので、大きくは集団の政治から個人の生活まで、そのすべてがこの人々にとっては神事であった。「神（かん）ながら」を対象（本尊）とした信仰では、外来宗教に見るような哲学や理論は必要としなかった。その代わり天地自然の中から来る大宇宙の無限大な知恵を、その人の霊能に応じて感じ取り、それを「ことあげ」（言挙げ）せずして形の中に、或いは手振りや動作を以て示してきた。

私は、私が許された感応の範囲に於いて、この古代人がもった「神ながら」の信仰を「ことあげ」しながら今の世の人々に伝えているのであるが、これが大倭教である。

幾千年の歳月は流れて、昭和四十三年の新春を迎えた。明治百年に当たるという。例年の如く、〆縄を張り陰陽一対の門松も立てた。この形を見ただけで、年改たまり、心気一転する思いがして、肚の底から何かこみ上げてくるものを感ずる。この形の中に、「ことあげ」しない古代の先祖達の心情が通っているからかも知れない。

形に残した宇宙の理

新春の行事としての飾り付けはすべて「相対即一体」の言霊（ことだま）を形の中に秘めてある。これが宇宙創成の原理を現わしている。〆縄も門松も鏡餅も陰陽一体、調和することによって和が産まれ、末広がりに栄えてゆくということを示すものである。

すべての人々が調和をとりながら仲よくして、すべての人々が幸福に暮らしてゆくという「神ながら」の信仰には、世界のあらゆる宗教に通ずる根本的なものが含まれているものと思う。なればこそ、こうした信仰をもつ我が国へ、儒教や仏教が渡来したのであるが、当時の人々は、こうした外来宗教ともよく融和をはかり、千年余りの間に仏教もすっかり、かつての「神ながら」信仰の如く生活の中に浸透して土着化し、神道・仏教はいわば夫婦のような形に於いて現在に生きているのである。

正月の民間行事や、宮詣りを始め、葬式のあと塩を使ったり、便所では手を水で清めたり、芸能界でよく見る手を〆るといって三三三（九）、最後に一つ拍手を打って十で終わる。或いは家を建てるときに執り行う地鎮祭や上棟式といったものから、芽出度いときに餅を搗くという伝統的な習慣、またもう近く始まるという初場所の相撲の儀式等々はいずれも、細々ながら現在社会に残っている根づよい古代信仰の神事と言えるのである。

※『すさのお』紙では番号をつけていないが、次が（四）なので、（三）相当として扱ったようです。

（四）
昭和43（1968年）2月23日発行
『すさのお』第17号より
（法主、満56歳）

日本の領土内で、今もなお健かな発育を続けているすべての宗教について言えることは、これ等を今日にあらしめた根本的な要素とは何か、ということである。これに対して私は、言うまでもなくそれは、古代人がもっていた「神ながら」の信仰であると言いたい。

彼等は、八百万の神々は統制のもとに一神から生まれ、その神々は常に摂理ある一神のもとへ帰一しているものという、要約すれば「一神即多神、多神即一神」という一体的神観をもっていた。こうした物の考え方や見方を、彼等は自然とともに生活する中から感じとっていたため、外来の宗教に対しても、本質的な抵抗をしないで一応はそれを受け入れ、抱擁し、かなり永い歳月を要して、いつとはなしに融和し消化して日本人の心の中に深く根を下ろさせていったのである。

それが色々な形をもって現在我が国に存続しているのであるが、これが所謂既成宗教と言われるものである。古義神道あり、神社神道あり、教派神道あり、幾多の宗派に分裂した仏教あり、神道・仏教両部にまたがる宗教といったように、日本の宗教は実に多色彩な様相を呈して、それぞれ特異性をもった動きを示している。

神棚と私達

現在の各家庭には、その殆んどが、神棚を作り仏壇を備えている。こうした形が現在の世まで伝えてきたことには、それはそれなりの理由や伝統があるのであるが、この問題は別として、現代人がこうした神棚や仏壇とどんな関連性をもって存続させているか、何故こうしたものが生活の中で必要とされるか考えてみればおもしろい問題だと思う。

神棚には色々な形式をもつ小型なお社を始め、有名神社等のお札や、弁財天・大黒天といった七福神等を並べて祀られているものが多い。朝これ等のお社にお水、塩、洗米などを供えて柏手を打って拝むことになっている。この祈りには、何かの要求が含まれていて、その要求を受け入れてもらい効果を現わしてもらうことを前提としている。

恐らく、今日一日は無事息災に大難は小難で済むようにとか、商売なら客の足を向けてもらうとか、取引が有利になるようにとか、その日その日に応じて自分に利益が来るように勝手な願いごとを一方的に押しつけている場合が多いと思う。ただ心の依り所として、鎮魂のため神棚の前で礼拝するならそれはそれでよいのだが、手前勝手な貪欲の片棒を負わせるような祈り方は余り感心したものではない。

また、神様が聞いてくれても聞いてくれなくても、そうして毎朝一度拝むことによって心の安らぎになり、自己慰安にもなり、一日の働きの励みにもなるといった人もある筈である。いわば若いマイカー族が、新年ともなれば有名な、コマーシャルのよく行き届いた神社仏閣へワンサワンサと押し掛けて、多額な金で買い取った商品に等しき交通安全の「お守り」をつける心に相通ずるものがある。事故を起こしている車には、大抵この種のお守りがつけられているのは皮肉である。

今もなお多くの現代人は、お社やお札には超人間的な霊威があって、人間が崇拝し礼拝することによって、人々の願い事を聞き、御利益を与えて下さるという身近な感じ方をもっているのには驚かざるを得ない。幾世紀前の原始社会の人々はこうした親近感をもって日常生活の中での神を見出していたと思うのだが、古代人がもった神に対する素朴な心情は、ゆがめられながらも二十世紀の現代人の心の奥深くで生々として蠢めいている事実は否定できない。

現代流行している新興宗教のどれを見ても、この事実を裏付けていると言えるのである。

私は今日の日まで、このお社には「お正念がありますか」とか「神様が鎮まっていますか」といった問いを、数知れないほど受けてきた。分からない者が分からないことを聞くのだから、回答する私の方が惨めになってくる。私の返事が質問者には、正解か誤解かその判別すらつかないからである。

邪悪な霊は、誰がつくるか

私がもつ霊的感応（動物的本能）によって見てきた多くのお社、つまり各家庭によって祀られているお社だが、その大多数は何ら霊的な動きも示さないし、何の感応もない。たまには、お社には何の感応もないのにその屋敷にある天狗霊が出てくることもあり、狐狸霊や蛇霊といった下級なものがチョロチョロと出てくる場合も多かった。

このような鎮まらないで座（格、相応な地位に納まる）にもつけない霊体のあることを知らずに同居している家庭には、ややもすると、次々に災厄が起こったり、或いは医術ではどうにもならない難病奇病という種類の病人が出たりなどする可能性が強いとも言える。

平成30年度大倭会文化講演会報告

平成30年11月17日　大倭拝殿にて

協賛　NPO法人むすびの家　FIWC関西委員会

平和への草の根・地下水の実践をたずねて
―ヒロシマでの活動から―

講師の多賀俊介さんは1950年、広島県呉市生まれ。高校の社会科教師を退職後、「廣島・ヒロシマ・広島をあるいて考える会」を立ち上げられ、また「ヒロシマと沖縄をむすぶつどい」・「韓国の原爆被害者を救援する会」の世話人や「シュモーに学ぶ会」のメンバーであったりと、幅広くピースボランティア活動をされています。

講演の後に発言をして頂いた方々に改めて原稿を書いてもらいました（先着順に掲載）。なお多賀さんの講演の記録映像も残してあります。

霊もここに一緒に来ている

あじさい(邑)　中島　健

私は昨年の文化行事で広島旅行にも参加しまして、今回の「平和への草の根・地下水の実践をたずねて」という的を得た表題で、多賀俊介氏のご講演は心に残るものでした。大倭流に考えますと、現界・霊界ともに必ず縁のある者同士が相寄ると霊感霊能は特殊な人だけがもつものだと普通に思われているが　これは鳥獣にも備わっている動物的本能の働きであって、すべての人にも潜在しているものであるが、それが或る程度顕著に出る人と出ない人といった相違に過ぎない。少々感ずる人であれば、邪霊的なものがその家庭に在って障害を及ぼしていることが感じられるので、それを除く意味に於いてお社に鎮めて祀るということになる。神棚にはこうした意味をもつお社も多い。或いはそれを除くために、有名な神社の分神霊を祀る場合もある。色々な意味をもって神棚は賑わってきたが、知識をもち合理性を尊ぶ次の世代の人々が、こうした信仰の形態を如何に見、如何に扱うか、今後の大きな問題と思う。（つづく）

いうことです。多賀先生と共に、広島で亡くなった人達の霊も、今ここに一緒に来ているのだろうなと感じております。

原爆によって焦土となった広島で、シュモー氏がボランティアで家を建てた。原爆を投下した国であるアメリカ人の行動が日本人の心に温もりを広げたことを思いました。これがワークキャンプというもので、その心はここ大倭にも流れるものだと知りました。

原爆の悲惨な足跡の中から、人の心の絆が生まれ、行動を起こしてこられた先人たちの歩みが後世に伝え残していくエネルギーも熱く感じた。大倭では、物事が発生するときは善悪同時に動き出す、あるいは人間は生まれる時に命を持ってくると教わってきた。

原爆投下になるまでの道筋は元は経済戦争から始まり、憎しみの心に変化し、命の取り合いになる。冷静に考えればとんでもない結果になった。それでも後に残った人たちが立ち上がったのであり、それがシュモー氏であり多賀先生である。語り部が大切な心を伝える大きな力となる。

皆のネットワークが絆となって平和に繋がると信じています。

後日、多賀先生からのFIWC・大倭会へご寄付、厚く感謝いたします。

空襲下を逃げた経験

三重県名張市　且田容子

去年広島に行き、多賀俊介さんの案内と説明を受け、本当に広島の人々の苦しみ、悲しみが伝わりました。

私は今、77歳ですが、振り返って今迄で一番恐ろしかった経験は?と聞かれたら、4歳の時（昭和19年）のことです。その時、大阪の大国町に住んでいました。姉妹は早くから和歌山に疎開して、両親の傍らには、一番下の私と一番上の兄だけでした。大阪に大空襲が来て、父母、兄、母に手を引かれた私が、防空頭巾をかぶって、24号線を難波方面に逃げました。

焼夷弾が上からバンバンと空をまっ赤にして降って来ます。泣き乍ら母の手を必死でつかんで一生懸命逃げました。横を見れば、頭に火が付いた人が用水桶に頭を突っ込んで、何人もの足だけが見えました。その光景は今でもはっきり覚えています。戦争で私達家族は、家も何もかも失くしました。

だから多賀さんには、原爆を知らない人に、これからもずっと語り部として、その恐ろしさを一人でも多く教えてあげてほしいとお願いします。

ワークキャンプの原点

兵庫県宝塚市　西面知佳

広島の原爆に心を痛めたアメリカ人がいたことを知らなかった。アメリカ人は「日本に原爆を落としたから戦争が終わったんだ」と、原爆に対して肯定的なイメージを持っているように、テレビ

のニュースやドラマで見たことがある。私は何も深く考えず、「そうなんだ」と思っていた。でもシュモーさんは、実際に広島へと足を運び、自分の行動をもってアメリカにも心を痛めている人がいることを示そうとした。

私は無意識のうちに「アメリカ人」という言葉のイメージに、原爆への肯定というレッテルを貼っていたんだなと気づかされた。人と人が繋がっていくのに、「○○はこうだ」とか「○○人」や「○○の人」などというレッテルを貼って大きくくくってしまえば、そこから広がる繋がりは薄いものになってしまう。シュモーさんという人がいたことを知って、もっと近いところで人と人と繋がっていくことは、きっと平和へ近づく第一歩になるのではないかと考えさせられた。

シュモーハウスのキャンプ地に「To build understanding By building houses That there may be peace」（家を建てることによって、理解も建設されていく。それは、平和へと繋がる）という言葉が掲げられていたと聞いた。ワークキャンプの原点だなと思った。

アメリカ人というだけで、いろんな憎悪を向けられたり、難しいことがたくさんあったことだと思う。でも、ワークキャンプを通して人と人が繋がっていったからこそ、この言葉があるんだなと思った。改めて、ワークキャンプって面白いなと考えさせられた。（現FIWC関西委員会委員長）

考えたことあれこれ

あじさい邑　李　章根

昨日知人が、自分は怪我をすると血が止まらなくなるのは、お父さんが入市被爆をしていたのが原因ではないかと話していました。初めて聞きました。こんな身近に原爆の被害を受けた人がいらしたんだと驚きました。

先ほどのレッテル貼りの話に通じるかもしれませんが、聞くとはどういうことなんだろうと。たくさん学ばないと聞くことはできないと思いますし、でも知識をいっぱい持って学んだからといって人の話を聞けるわけでもない。知識でがちがちになってしまうこともある。

聞くということを大漢和辞典で調べたことがあるんですが、耳偏の「聴く」という字には、待つ、ゆるすという意味がありました。自分の思いや知識で一杯だと、どれだけ学んでも聴けないんじゃないか。聞いても自分の経験と言葉のイメージで人の話を聞くので、相手の背景（文脈）から話していることを受け取ることはできず、どこまでも自分の解釈の世界に入ってしまい、理解の落しどころはいつも一緒（発見も向上もない）となってしまうのではないか。いつも問われるところです。

仏教カウンセリングの先生が言っていたのは、持国天、広目天、多聞天、増長天と言われる四方を守る護法神の話で、待つ、ゆるすをもたらす広目という広い目があって初めて多聞なんだと聞いたことがあります。なかなか難しいことです。

最近文庫本になった『原爆供養塔』（文春文庫）という本を少しずつ読み始めたのですがすごい本だと思います。日本人の死者をおさめる原爆供養塔でさえ、出来るのに十年かかり、それをつくるのにもいろんな反対があったんだと。けれども原爆によって殺された一人ひとりの遺骨を何とか調べて遺族に届ける、伝えるということや、供養塔をつくるのに命がけで尽力された人が、一人一人バラバラなんだけど、何人もいたんだと知って、やっぱり一人から始まるんだなと思いました。

朝鮮への加害について

大阪府茨木市　杉　浩史

この度「シュモーハウス」についての講演を聴き、触発されたことを書き記す。

先の大戦で日本に原爆を投下した米国の一市民が、相手国の日本（＝広島）への贖罪のために建てられたのが、米国人＝シュモー氏＝による「シュモーハウス」である。私は最近まで、その事実について殆どのことを知らずにいた。

さて日本はかつて朝鮮と言う国の主権を奪った時期がある。生活に困った朝鮮人が日本に入国。加えて日本政府も朝鮮人を母国から連れ去り、本土で日本人のイヤがる数々の仕事に無理やり就かせたりした。こうした事情のために、1945年の敗戦当時200万人を超える朝鮮人が日本に居た。ところがその朝鮮は、日本の敗戦と同時に当時のソ連と米国との二大勢力が分割し、やがて両者は戦争状態を経て、昨今若干の好転模様も見られるが、基本的には今に至るも敵対（？）状態。

こうした中、親類友人が引き裂かれ、北と南の人々はそれぞれ相手側を祖国として「受け入れる」ことが出来ないでいる。かくして、幾人もの在日朝鮮人がこの日本に……。この外国人に対して、日本政府は彼等の権利保障に極めて不熱心。多くの日本人は頗る「配慮」を欠いている。

ヘイトスピーチのシュプレヒコール＝「お前ら、朝鮮人やろ。そんなら朝鮮へ帰れヤ」。＝ああーーあっ、何という無理解……＝

ヒロシマへ　旅のはじまり

奈良県生駒市　樋口　須賀子

今夏、FIWCのキャンパー仲間の佐久間礼子さん（夢ちゃん）に誘われて、久しぶりに広島を訪れた。「ヒロシマの孫たちへ」被爆体験者の語りにのせて、子ども達が身体表現していく。70数年前の子どもと現在の子どもがオーバーラップして、毎年の公演の中で育まれた表現はすばらしい。観劇の後と翌日に平和公園と資料館を歩いた。

その後に届いた文化講演会の案内に、夢ちゃんと参加しようと決めたのも自然の流れだった。

講師の多賀俊介氏にお会いするのは初めてと思っていたが、お話を聞く内に、夏に資料館でお話をしていただいた方ではないかと思いだした。

1952年、両親に連れられて、初めて広島に行ったのは小学校3年の夏。1946年中国大陸から引揚げて、大阪での生活がやっと落ち着いた頃。戦後、全国各地の鉄道に設置されたRTO（連合軍鉄道輸送司令部）がサンフランシスコ平和条約の締結によって全廃になったのが1952年で、国内の旅行も自由になった。でも初めての旅先に広島を選んだのは何故だったのか？

安芸の宮島で一泊して翌日、ヒロシマへ。兄6年生、1年生と2歳の弟達と両親で復興の町広島と資料館へ。多賀氏のお話に出てくるシュモーハウスや広島の家がシュモーさんと仲間達、日本人のボランティアによって建設された時期と重なる。

資料館で見た壁に残る人の影、小頭児や被爆者の生々しい写真や資料の数々に強烈な印象を受け、持ち帰った被爆レンガや石などを見せて、夏休みの課題発表をした。当時私が訪れた資料館は、開館して間が無かったことを今夏、館のスタッフから聞いて知った。

戦後生まれの多賀氏は、お父さんや伯母さん達が被爆者であったことが原点となり、現在の活動に結びついている。私の場合は1歳で中国に渡り、3歳で引揚げ、敗戦後の混乱など記憶にはないけれど、私の心を動かす何かが体感として残っている。

初めて参加したワークキャンプは猪飼野の朝鮮キャンプ。ユダヤ系アメリカ人や朝鮮・韓国の学生達と一緒に汗水流したキャンプの風景を多賀氏のお話……シュモーさんと仲間達の活動から思い出した。1966年、復帰前の沖縄を旅したのもキャンパー仲間の末光佐規子さんとだった。

次にヒロシマに行く時は、多賀氏にお願いしてシュモーハウスを訪れたい。そして、久しぶりに丸木位里・俊夫妻の『原爆の図』にも再会したいと思っている。

一人の小さな動きをはじまりに

大阪市　戸張　岳陽

――良心に語りかける歌――

政治の力が日ごとに大きくなっていく様に感じます。3・11東北大震災後、特に政権交代後の政治のあり方に違和感を覚え、あまり行くことのなかったデモや集会に足を運ぶ様になりました。そんな中、中川五郎さんの「一台のリヤカーが立ち向かう」という歌に出会いました。

歌は、社会情勢に苦しみながらも圧政に立ち向かう人達を紹介しています。

「横須賀の街に核を持ち込むな」とリヤカーにアンプとスピーカーを積んで歌い続けた男／「漁師たちの命の海を奪うな」と一艘のシーカヤックで中国電力に抗議する若者／故郷や歴史を守るため、一個の石つぶてを戦車や軍隊に投げるガザの子供／黒人と白人と座る場所を分けられたバス席で、警官に「立て」と言われても白人の席に座り続けた黒人女性／弱い者いじめの国家や金持ちに「このマシンはファシストを壊滅させる」と書いたギターで立ち向かったウディ・ガスリー／独裁者の軍事政権に立ち向かい、連行され腕をへし折られ殺されるまで歌い続けたビクトル・ハラ

歌は救済のヒーローを安直に求めず、歌を聴く私達一人ひとりの良心に希望を持って語りかけてきます。

一人の手じゃ世の中は変えられない
二人の手でも世の中は変えられない
でも二人が百人、千人、百万になれば
世の中は変えられる、その日が来る

――憎悪の感情を人から向けられた時どうしたらいいでしょうか？――

多賀さんの講演会でシュモーさんの足跡を辿る話を聴きながら、その事が気になったので最後に尋ねました。

デモや集会では立場や主義主張の違いから、対立や分断を余儀なくされることがあります。時に相手の感情をかわすことができず悶えることもあります。

はじまりは個人的だった感情も、集団になると単純化し増幅されていきます。そして出自不明の「匿名化」された暴力に姿を変えてしまうと、もう個人では手に負えなくなります。「匿名化」された暴力は他者を攻撃することが自己目的です。その対象を探し出し、或いは時に作り出して攻撃

します。集団のエネルギーは破壊へ、そして戦争へと向かいます。

原爆で多くの犠牲者を出した広島・長崎。その原爆を落とした国からやってきたシュモーさん。その葛藤はどれほどのものだったのでしょうか。

――一人ひとりに問いかけること――

多賀さんはシュモーさんの言葉を引用せず自身の体験から話されました。「集団という塊に何かを働きかけるのは難しいですが、一人ひとりに〈なぜそう思うのか?〉と、問いかけを続けていくことが大切なんじゃないでしょうか。そうすることで、何か共有できるものを探していけたらいいと思います」と優しい声で胸のすく回答をいただきました。

その時、先の中川五郎さんの歌を思い出しました。**「大きな世界を変えるのは一人の小さな動きから」**。そう締めくくられるこの歌は、この度の講演会、そして自分がこれまで参加してきたワークキャンプと激しく呼応します。

ワークキャンプ＝集団のエネルギーを破壊ではなく、創造的平和の建設の方へ。復興だけが目的ならアメリカ式の住宅をバンバン建設すればいい。そうではなく、日本家屋のつくりかたを現地の人に学びながら共に汗をかくことを選んだシュモーさん。戦禍の町での出来事だった。その荒れ果てた土地で暮らす一人ひとりの心のこわばりは、シュモーさん達との具体的な関係の中でやがて快復していく。「シュモーハウス」とその建設にあたったワークキャンプは、そんな他者理解への一つの指標になったのではないかと想像します。

しかし、シュモーさんの行動を美化せず、どんな状況にあったとしても特別な誰かを求めるのではなく、「良心は自分の中にあるか」、そう問い続けていくことをまずは課題としたいです。

「個人と個人との出会いを大切に、それを軸に展開していくこと」「明日出会う人が今の自分を変えてくれるかもしれないという予感」。ワークキャンプの先達から教えられた言葉は、活動から少し離れた今も大切にしています。

一人の小さな動きからはじまる可能性。集団のエネルギーが戦争ではなく創造的平和の建設へと向かうイメージを持つこと。喧しくうそぶく声が高まってきている今だからこそ、そこに希望の熱情を持ちつづけていきたいです。

時の波蕩（その24）

平成31年元旦
大倭大本宮拝殿階段下にて

大阪府枚方市　林　修三

2019年、平成最後の元旦は、清やかな陽の光におおわれた晴れ渡る日となった。大倭神宮参拝へとむかうバスの中から、冬枯れもせず粛々と光り輝く植物達をながめた。本年も又、善き事と悪しき事が、この世界と私にもくり返し訪れるだろう。しかしすべては「なるようになり」、そして過ぎて往く。その一つ一つと向かいあい、悩み、悲しみ、喜び、命あるかぎり生きていこう。

神宮に到着し、今年も又、皆と「くにのもと」を歌った。これまでも何度となく歌ったその歌の一節一節が、今回は妙に胸に応えた。

〝……山かすみ　流れは清し　花香る　稲の波打つ　大倭　おほやまと　還れよかへれ祖神の神園〟

まだ10代のおわり頃、ある日神示のように響いた「万古の昔に帰れ」の言葉は、その時点では意味もわからず、只、重く胸に刻まれたままだった。現今その意味するところが痛い程、心に沁みいる。

今の世は正に天変地異まっさかり、人の世の乱れは、天の気を乱し、天地人にわたる大いなる変動が始まりつつあるように見える。この時代、法主の言われる「雨後のたけのこ」の如く、様々な宗教団体、あるいは霊能者と呼ばれる人々が競い立っている。それは現代風に手を変え品を変えてはいるが、その実態は古い昔からと変わらないように思える。各人が受ける霊感（インスピレーション）は、それなりにその人にとっては意味のある事なのだろう。しかしそれを他人が信じ、従ったり、又、その個人の世界に他人をひきこむのは如何なものだろうか。

ヒトはそのヒト一人一人が尊く、正に「唯我独尊」なのだから、己自身に備わっている「自己本霊」と繋がっていれば、それでいいのではないだろうか。そしてその繋がる努力こそは、この各自に与えられた人生の場で、毎日行う事が出来る。それこそは又、法主の言われる「宗教とは人間性の向上」というお言葉とリンクしているのだろう。

30年近くも以前、初めてお会い出来た法主からお聞きした「自己本霊を高めなさい」という教えは、今になってやっとその意味する所が見えてきた。山にかこまれ、清き流れがあり、動物や植物達と共に生き、稲づくりに励む仲間や家族と過ごす日常の中の何げない一日。それこそは楽園「おほやまと」。奢り、高ぶり、貪り等々を捨て去り、そこへ帰れと。そここそは誰ものふるさと……。限られた人生の内で、貴重な一日に出会う人々・物事の中に、己を見、持ち来たれる自身の因縁に戦きながら、一歩でも前に、霊界の「おおやまと」への道をゆきたい。

ひはてらす　とりはさえずり　きよらなる
かみのみやいに　ときつかぜのふく

あじさい日誌

12月10日　大倭会会員、大阪府豊中市の石田昌男さん帰幽、享年96歳。祭典や行事の常連でした。奥さんのスミ子さんから「長年お世話になりありがとうございました。歳に不足はないといえ、急な旅立ちで心細く寂しくなりました」と寒中見舞いでのご連絡でした。

12月12～17日　大倭神宮の奇稲田姫命の奥津城にある鳥居の傾きを正す作業が行われました。

12月15日　大倭神宮月次祭。今年最後の月次祭で、教長さんはインフルエンザをおして祭主を勤められました。中野英樹（栃木県茂木町）・中本好子（広島県大崎上島町）・坂田洋美（大阪府大東市）さんが参拝。

12月16日　8時から大倭墓地の大掃除。9時20分頃からの紫陽花邑の大掃除には、大倭安宿苑の職員さんが大勢参加してくれ心丈夫でした！　地域貢献なんだそうです。

12月21日　紫陽花邑内各所と大倭神宮に門松が飾られました。

12月22日　冬至。大倭の大晦日にあたるこの日、有志が餅つきやお掃除等々、日聖祭の準備をしてくれました。

12月23日　大倭75年元旦。10時から法主奥津城でご挨拶。10時30分、拝殿において日聖祭が行われました。今年から祭典後に、紫陽花邑守護神（霊）の五つの拝所に教長さんによるご挨拶回りが行われました。

1時から大倭会館で恒例の直会演芸会。今年のエントリーは9演目でした。毎年の参加の方に加え、病後の菅野弘子さんが得意のカラオケで歌いました。

12月24日　9時から大倭神宮の大掃除。日聖祭に来られ大倭会館宿泊中の高橋延之・末子夫妻（青森市）や松尾俊一・元子夫妻（静岡県浜松市）が参加してくれました。昼過ぎ頃終了。

12月27～30日　交流の家でFIWC年末キャンプ。全国各地のメンバーが集いました。29日には頼まれて、中島健さんが紫陽花邑との関係を話しました。

12月30日　8時頃から餅つき神事。キャンパー達も参加、楽しい餅つき大会になりました。

12月31日　午後1時から邑の男達が神宮の年始祭準備や拝殿のお供え物の飾り付けをしました。また夜11時半より過ぎし1年間の祓い清めのため大太鼓が365回打ち鳴らされました。

1月1日　大倭神宮年始祭。それに先立ち12時40分から紫陽花邑で各拝所の五神参り。

1月6日　大倭神宮月次祭。

夜6時から大倭会館で、教長さん主宰による邑人やご縁の人達の新年会が行われました。

1月7日　11時から拝殿において大倭安宿苑、大倭印刷、大倭殖産、教務本庁の関係者らが集合、年始の挨拶をしました。

法主奥津城の長イスが腐蝕、山﨑正知さんがケヤキの一枚板で新しく作ってくれました。

1月9日　拝殿のエレベーターの部品交換が行われました。

大倭安宿苑では

12月12日　午後6時30分より表彰祝賀会が開催されました。（菅原園）

12月15日　地域交流会。ご家族もたくさん来られました。（須加宮寮）

1月1日　元旦祝賀会。午後から大倭神宮へ初詣をしました。（長曽根寮）

12月23日（特養）／25日（デイ）　クリスマス会を行いました。（茂毛蕗園）

1月8日　昼食は新年をお祝いする創作料理。（八重垣園）

1月1日　朝はお雑煮・三種盛りと小豆粥、昼・夕はお節料理。

こだまことだま

神奈川県横浜市　加藤　彰彦

新しい年おめでとうございます。いつも『おおやまと』をお送りいただきありがとうございます。12月号で法主さんの80歳のこと、また野の花診療所の方々のことを読みました。ぼくも視力がおちて文字がうまく書けなくなり通信もやめます。ゆっくりあきらめてポチポチやっていきます。今年もよろしくお願いします。（筆名：野本三吉）

法主帰幽祭　ご案内

日時　平成31年2月9日(土曜日)

- 午後1時40分より法主様奥津城（おくつき）においてご挨拶をいたします。
- 午後2時より大本宮拝殿においてお参り後、平成2年12月23日の降誕祭の映像記録を見ていただき、その後教長さんのお言葉をいただきます。

現身（うつしみ）はよし朽（く）つるとも永久（とこしえ）に
結ぶ心のかわるものかは

宗教法人　大倭教

あんない

＊玉緒祭（大本宮）
2月3日(日)　午後2時より大倭大本宮拝殿にて。

玉緒祭は宇宙根本神霊と人間の本霊との結びを感謝するお祭り。玉は命を、緒はひもを言う。

＊月次祭（大倭神宮）
2月6日(水)　午後2時より大倭神宮にて。

＊法主帰幽祭
2月9日(土)　上欄参照。

＊大倭会主催第601回禊会
2月10日(日)　午後2時より大倭大本宮拝殿にて。

＊月次祭（大倭神宮）
2月15日(金)　午後2時より大倭神宮にて。

＊申孝祭と月次祭（大本宮）
2月23日(土)　午後1時20分より大倭神宮にて申孝祭が、2時より大倭大本宮拝殿にて月次祭が行われます。

申孝祭は、神武天皇が行った祭政一致の故事、鳥見山中の霊（れい）時を記念するお祭りです。

訂正　12月号7頁2段目16行目、「わったい（おお、すごい）お月さん」のように訂正。ネットで調べて鳥取弁の意味を（）内に入れたが、（）が印刷されていなかった。原因不明。